
れせぶしょん?

戮月天祢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

れせぷしょん？

【Nコード】

N6470L

【作者名】

戮月天祢

【あらすじ】

初めまして。僕、萩月凜^{はつきげん}。紫苑高校二年の平凡な高校生です。

まあ、あることを除けばなんですが……。

憧れの先輩が亡くなって幽霊になって僕の前に！！そんな異常事態にさらに死神って名乗る金髪の美少女まで。

僕の生活がいろんな意味で壊れてくお話です。

—— 始まりの日 ——

—— 始まりの日 ——

「ずっと好きです。俺と付き合ってください!!!」

不意に響く男の人の声。僕はその声で目を覚ました。

視界に映るのは自由気ままな白い雲が浮かぶ青空。優しく撫で付けるように柔らかな風が吹いていて、絶好の昼寝時。

今は昼休み。僕は学院の屋上、正確には屋上の出入口の横にある梯子を上がってもう一段高い所に居るんだけど……。

下から話し声が聞こえてきて、

「その、あなたの気持ちすごく嬉しい」

「じゃ、じゃあ」

上から頭半分だけ出して息を殺しながら様子を伺ってみる。

そこには一組の男女の生徒がいて、その様子と会話の組み合わせから『告白』という言葉が浮かんだ。学校の屋上でのイベントってほんとに有るんだなあ。

僕は告白イベントの行く末をひっそりと見守りながら、

「あれ？夏先輩だ」

見覚えのある先輩の姿に感嘆のため息をついた。

僕も通っている高校。紫苑高校一の美少女が誰かのアイドルになるうとしてる。

夏先輩、これで何人目だろう？

僕のため息が合図だったかのように夏先輩が相手の男子に頭を下げた。

「ごめんなさい」

「うわっ残念」

僕は心の中で男子生徒によく頑張ったよ、と賛辞を送った。

「……っあ」

男子生徒は状況がわかってないのか金魚みたいに口をパクパクさせてばー然としていた。

「ごめんなさい」

夏先輩がもう一度その言葉を口にして、男子生徒は我に返ったように慌てて謝り返していた。

「いえ、気にしないで下さい……………気持ち伝えただけで十分ですから。じゅあ、俺はこれで」

笑顔を引き攣らせながら手を振った。男子生徒が屋上のドアを引き、ドアが閉まる音がした。

夏先輩はそれからしばらく経ってから頭を身体起こして、ため息をつきながらフェンスに近寄って手をかけ外を眺めていた。

僕はそんな夏先輩を眺めながら、

（振る方も楽じゃないってことか）

ゆっくり梯子を降りた。

降り切っても夏先輩は僕に気がついていないようで、なるべく驚かせないよう声をかけた。

「お疲れ様、夏先輩」

その声にビクツと肩を跳ね上げ、物凄い勢いでこっちを振り向く夏先輩。

「り、凜!？」

なんか、物凄く驚いてるな……………悪いことしたな。

「い、今の……………」

「はい、俺と付き合って下さい……………のところからいきましたよ」

「ななんで!？」

首筋まで真っ赤にして焦る夏先輩。

「なんでって、僕が寝てるところに夏先輩達の告白イベントが発生したんですけど……………」

僕は申し訳なさそうにほっぺを掻いて、

「今の人、二年生ですよ。結構格好よかったのにもったいない」
夏先輩に視線を合わせた。絹のようにまっさらな白い肌に黒みがかった澄んだ瞳に形の良い鼻。血色の良い柔らかそうな唇。それらがそこにあることが当然だったというふうに整った顔立ち。ブレザー越しでもハッキリとわかってしまう双丘に無駄なく引き締まったくびれにそれをよりも強調するようにでたお尻。僕よりも頭一つ分以上高い身長。

テレビで見るアイドルや雑誌に載っているモデルと比較してもかなり飛び抜けている。

夏先輩を見ているとさっきのイケメンの男子生徒が凡夫に思えてきた……まあ、自分はそれ以下って事になるけど。

「まあ、格好よかったとは思っけど……」

「夏先輩のストライクゾーンではなかったと」

僕は気の毒にと苦笑いを浮かべて、

「そっいえば凜、お昼済ませた？」

「10分くらい前に」

夏先輩の隣まで近寄ってフェンスに寄り掛かる。

「そっ、なんだ」

少し残念そうな表情を浮かべる夏先輩。

「夏先輩はまだですか？」

「うっん、軽く済ませたから」

「じゃあ立ち話も何ですし」

そう言っ僕はすぐ近くにあったベンチに近寄って座る場所を手で払って。

「ほら、ここに座って話しましょう」

夏先輩をベンチにエスコートする。

「ありがとう」

先輩は長い髪を耳にかけて、ベンチに腰を座る。僕もベンチに座り、話を続けようとして。

「……………」

横目で僕を見る、
 というか睨んでるような目つきの夏先輩。

⌈
.....
? ⌋

何だろ、僕にかしたかな？

「あの」

「ねえ、凜」

僕の声を遮り、夏先輩が話を進める。

「何ですか？」

どこか冷たい感情が見えかくれる瞳に背筋を伸ばし、一言も聞
きもらさないよう身構えて、

「私にはもったいないっていうけど凜は彼女作らないの？」

「彼女って……あははははっ はははははははは！」

僕はあまり聞き馴染みのない言葉にお腹を抑えて大笑いした。

「ちよつ、何で笑うのよ？」

「くははっはは、はあはははあっつ……だっ
て彼女って」

僕は笑いを堪え、息を整えて立ち上がる。

「夏先輩はどう思います？」

夏先輩の正面に立って、両腕を広げて質問してみた。

「うん、うん、うん。」

「僕の事ですよ。こんなに背が低くて小学生みたいで、顔だって小学生みたいで男要素全くないし、それに髪と瞳の色が紫色って気持ち悪いでしょう？成績だってそんなに良くないし……良いところ何もありませんよ」

僕は自分の欠点を言いながら少し……かなり悲しかったけど苦笑いで夏先輩にもう一度質問した。

「別に。私は気にならないけど？」

それがどうしたの？と首を傾げる夏先輩に少し驚いて。

「そ、そうですね？」

「まあ、人の好みもあると思うけど私は良いと思うけど」

血色の良い柔らかそうな肌に小さくて控えめな可愛い鼻。これまた柔らかそうな唇に左右色の違うクリッと大きな丸い瞳。可愛いを

たくさん詰め込んだ顔立ちは男の子というよりは女の子みたい。

確かに本人がいう通り男の人特有の逞しさは全然ない。けど、そこが。と、そこまで考えていたらふとあることが気になった。

「そっといえば話は変わるけど」

「何ですか？夏先輩」

夏先輩は僕の右眼を指差して、その動作に嫌な感じがして。

「凜、右眼だけ瞳が黒だけどなんで黒くしてるの？カラーコンタクト？」

その言葉に反応したのか右眼が少し疼いた。

「右眼の瞳の色が左と違うんです」

「瞳の色？」

「はい、銀色なんですけど……猛禽類って言えばいいのかな？ワニとかそういうった感じの瞳の形をしててちよつと怖いんですけど」

僕の答えに夏先輩は「ふーん、そうなんだ」って別段興味を示さなかった。

僕はこれ以上右眼について話したくなくて、

「まあ、こんな何も取り柄もない僕を好きになってくれる人なんていないですよ」

強引に話のベクトルをねじまげた。

「……………そんなこと、ない」

「へ？」

今にも空気に溶けて消えてしまいそうな小さな声で夏先輩が呟いて、

「そんなことないよ」

今度はハッキリと大きな声で言った。

夏先輩は顔を背けていて、何故かほっぺがほんのり赤くなっている。

「夏先輩？」

どこか様子のおかしい夏先輩に近づこうとして。

「凜、好きな人いる？」

かなり大きくて強めな声に足が止まった。

「好きな人？別にいないですけど……」

「ほんとに？」

「ほんとです」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんと」

夏先輩の顔色が少しずつ赤くなって、瞳も少し潤んでいて具合が悪いんじゃないかと心配になってきた。

「夏先輩、どうか具合でも悪い」

悪いんじゃないあ、と言いかけたところで昼休みの終わりを告げる鐘がなって。

「もう終わりか」

ズボンのポケットから携帯電話を取出して時間を確認する。

「じゃあ行くね」

「夏先輩」

夏先輩は僕の呼び掛けに振り向かず屋上の出入口に向かう。

「凜！！」

ドアを開いたところでこっちを振り返ってこれ以上ないくらい真剣な表情で言った。

「明日の放課後、話したい事があるの」

「話したいこと？」

「うん……大切な話」

「今日じゃ駄目なんですか？」

「今日はちよつと用事があるから、ごめんね」

「じゃあ、明日の放課後。屋上でいいですか？」

「うん、お願い」

「わかりました」

「じゃあ明日、放課後屋上で」

そう言って夏先輩はドアの向こうに消えた。

そしてこれが僕と夏先輩の最後の会話になった。

——4月27日——

——4月27日——

「……………はあ」

僕はネクタイを乱暴に外してベットの上に仰向けに横たわった。

「……………」

夏先輩がこの世から去って今日で5日目。

今日は夏先輩のお葬式だった。

僕は喪服のままベットの上でお葬式の事を思い返した。参列者は血縁関係は勿論、高校だけではなく中学校や小学校時代の同級生から先生と会場から溢れてそのほとんどの人達が泣いていた。

葬儀中は嗚咽と泣きじゃくる声が止むことなく、悲しみだけが溢れていた。運命はあまりにも残酷で神様はどうしても悲劇が好きみたいだ。

5日前。夏先輩は夕方下校途中で夕飯の買い出しでスーパーに立ち寄ったらしい。

その場にいた目撃者の話ではスーパーから出てきた夏先輩をナイフで心臓を一突きで刺され、ほぼ即死だったらしい。犯人はすぐその場から逃げ、そのまま逃げたのかと話を聞いたら。

——グシャツ。——

赤だった信号を無視して横断歩道を渡って、大型トラックにひかれ、犯人も即死だったらしい。

この話を聞いた時、可哀相だなんて思った。勿論、犯人なんかじゃない。夏先輩のお父さんだ。

最愛の娘である夏先輩を奪われて、その奪った犯人も死んで憎しみを向ける対象もいなくなって、ただ哀しみという絶望だけしか残らなかったんだから。

お葬式が終わって最後。夏先輩のお父さんが集まってくれた人達に一人一人に挨拶して回ってた。

僕はどういう顔でどう言葉を交わしたらいいのかわからなくて、あたふたしてた。必死に何を話そうか考えてた時に不意に夏先輩のお父さんと目が合って。

夏先輩のお父さんは相手をしていた人に会釈して、真っ直ぐ僕のところ歩いてきた。

僕は夏先輩のお父さんに名乗ろうと口を開いて、

「初めま」

「萩月凜君だね」

何の迷いも無く言い切った夏先輩のお父さんに僕は口を開けたまま驚きで固まったまま言葉が出で来なかった。

「なんで僕の名前を？」

よくありがちな問い掛けに、夏先輩のお父さんは小さく苦笑いで答えた。

「娘、夏子からよく話を聞かせられていてね。それに目立つ髪の色だったからすぐにわかったよ」

「そう、ですか」

「……………はは、昨日までくだらない話をしてあの娘が作ったご飯を食べながらのんびりしてたんだけどね……………」

顔は笑顔だった、文句なしに。でも。

「おっとそっいえば名乗ってなかったね」

瞳の奥に感じたのはどこまでも深くて深すぎて絶望だけしか見えない、そんな悲しみ。

「神村冬樹だ、よろしく萩月君」

そんな悲しい笑顔で差し出された右手。そんな右手を僕はただ見つめて。

「萩月凜です。よろしくお願いします」
握手をしようと僕も右手を差し出そうとした時だった。

ズキッ。

右眼に突然釘を打ち込まれたような鋭い痛みが走って。

「うぐっ!？」

僕は右眼を押さえ、痛みが抜けそうになる両足に必死に力を込めてその場で痛みを堪えた。

「っ……………」

「どうしたんだい？具合でも」

僕の様子に異変を感じたのか、冬樹さんが顔を覗きこようとして。

「大丈夫です、少し目眩がしただけですから」

「そう、かい？」

「はい」

傷みに呻きそうになるのを堪えて。

「あまり長くいてもなんですから、僕はこれで失礼します」

僕は軽く会釈をして、

「少し休んでいった方が」

「それは冬樹さんの方ですよ。目の下にクマができてますよ。あまり寝てないのまるわかりですよ」

冬樹さんの気遣いにもう一度会釈をして、僕は夏先輩の家を後にした。

「……………はあ」

普段は広くて快適な部屋も、ため息しかでない今の僕には牢獄みたいだ。

夏先輩のお父さん、かなり無理してたな……いや、正確には夏先輩と親しい人達全員か。

夏先輩が亡くなってから全てが変わってしまった。学校では生徒は勿論、成績も優秀で素直で人通りの良い夏先輩を可愛がっていた先生方。帰り道でよく話をしていたお母さん方と皆、夏先輩の死をまだ受け入れられないようだった。でも仕方ないとも思う。現に僕も今だに先輩が死んだって実感がないんだ。

それこそ、いまにもドアをいきなり開けて「凜、遊びに来たよー！」「って来てくれそうな気が。」

ズキッ！！

「つつう！？」

いきなりすぎる右眼の激痛に僕は跳ね上がるように体を起こして、右眼を押えたままふらつきながら立ち上がる。

「もう……また取り付かれたかな」

僕は止むことのない激痛に足元をふらつかせながら部屋を出て、壁に寄り掛かりながら階段を降りていく。目指す場所は洗面所、そこで右眼のコンタクトを外した。

「最近はなかったのにな……気分が落ちると寄ってくるのかな」

僕は洗面所へたどり着き、鏡の前に立つ。

右眼の黒のコンタクトレンズ。これはあえて黒にしてある。黒なら完全に視界を遮って何も見えなくなるから。

「つと」

僕は右手でコンタクトを外し、

「あまり怖くありませんように」

どこの誰にというわけじゃなくお願いをして、閉じていた瞼をゆっくり開いた。

「……………」

「……………」
鏡越しに見える人影。僕は当然映っていて、もう一人のそこに映っていたのは。

「……………」夏先輩」

僕は夏先輩の姿に絶句した。

—— 4月28日 —— (前書き)

遅くなりました？

—— 4月28日 ——

—— 4月28日 ——

右眼のコンタクトを外して、正面を見る。

「お帰り、凜」

少し気まずさ伝わって来る笑顔で僕の部屋で出迎えてくれたのは。

「……ただいまです、夏先輩」

僕の学院の先輩。元だけど。

「……………」

「……………」

それだけ言うと僕も夏先輩も続く言葉が出てこなかった。

昨日、お葬式が終わってから大体一日が過ぎようとしてるけど…

…………… やっぱり夢じゃないんだ。

「……………」

「……………」

僕の目の前にいるのは夏先輩、それは間違いないんだ。

見慣れた制服に綺麗な長い黒髪、透き通るような白い肌。少し切れ長の黒みがかった瞳に形の良い鼻に唇。制服の上からでもわかる眩しいボディーライン。

学院一の美少女が僕の部屋で僕を出迎えてくれた。きっと学院の男子に知られたら間違いない半殺し…………… うっん、殺されるだろうなでも、宙に浮いてなかったらだけど……………。

「……………」

「……………」

もう何度目かわからない気まずい沈黙に、夏先輩が恐ろしく長いため息をついた。

「もうっ！私らしくないのはやめ！！」

「いや、私らしくないって……仕方ないと思いますよ」

僕は夏先輩が出してくれた助け船に乗り、そのままの流れで会話を続ける。

「夏先輩は……死んでしまったわけですし、もっと落ち込んだり泣いたりしていいんですよ」

「まあ、過ぎたことをいつまでも悔やんでも変わらないでしょ。

それに死んで幽霊になっちゃったけど凜とはこうして話も出来るし…… おかげで少し気持ちが楽だし」

「夏先輩がそういうならいいんですが……」

僕はそう言っただけ僕に少し上に浮いている先輩から目を逸らす。

「そうそう、本人が言ってるんだから気にしな……って顔赤いよ、どうかした？」

「いえ、その……えっとーあの」

夏先輩は戸惑ってる僕の様子に首を傾げ、

「もう、ほんとにどうしたの？」

「いや、その……み」

「み？」

僕は顔を俯け、恥ずかしさで破裂しそうな心臓を押さえ、意を決して夏先輩に告げた。

「み、見えそうですよ！！」

「見えそう？何が？」

「す、すす」

「す？」

「スカートの中……！！」

僕は声を張り上げ、夏先輩は始めは何を言われたのかわからなかったらしく僕の言葉を繰り返して。

「スカートの中……っ！！」

すぐさまスカートを押さえ、高度を低くする。

僕は恐る恐る夏先輩へ視線を戻すと、そこには顔を色んな意味で

赤くした夏先輩がこっちを睨むように見つめていて。

「……………見た？」

うつ、物凄く怖い。

「えっと……………」

「……………」

正直に言いなさいと視線が突き刺さってくる。

「……………えっと、黒なんて大人っぽい夏先輩にピッタリ」

ですね、と僕が言い切る前に。

「凜のバカーーツ!!!」

夏先輩渾身の右平手打ちが僕の左の頬つぺたを寸分の狂いもなく打ち抜いて、僕は部屋のドアまで吹き飛ばされる。

「グッ…………てて」

体を起こしてそのままドアに寄り掛かって、

「もう!!!なんで男の子は…………って」

夏先輩は怒りを吐き出そうとして、あることに気がついたようで自分の手を愕然と見つめた。

「なんで……………」

まあ、驚くよね。

「なんで……………なんで凜に触れるの!？」

僕は夏先輩の戸惑いに答えた。

「『魔力』って言えばいいのかな？僕はそれが生まれつき高いんです」

右眼を指差して、夏先輩に説明した。

「僕の父親、正確には萩月家がそういう家系なんです。僕の家、萩月家は代々特異な力を 力を持って生まれてくるんです」

大体は幽霊関係の能力で、普通は何か一つぐらいで透視だったり幽霊と話せたり、極稀に火だったり水だったりを操ったりとか珍しいものもある。お祖母ちゃんと父さん、僕は歴代で五本の指に入らう。いずば抜けて魔力が高い。

僕と父さんは幽霊が視えて触れて話せる。お祖母ちゃんは今一

つ能力があつて、それで仕事とかもしてる。

「まあ、テレビに出てくる霊能力者の人達からすれば僕らの方が『視』えてないって言われることもありますけど」

「……………普通は『視』えてても話せたり触れたりはしないんだ」

「そうですね…………『視』るのと話す、触るは動作としては別ですからね。普通はないですね」

「つまり……………」

夏先輩は不安げな表情で呟いて消えてしまいそうなほど小さい声で言った。

「凜にとつては私は幽霊だけど、普通の人間みたいにできるってこと?」

「ええ、基本的には」

僕は夏先輩の問いに素直に答え、

「……………へ?」

突然起こった出来事に素つ頓狂な声が出た。

不意に前身を包む柔らかい感触に、香水かな? 桃みたいな甘い匂いが僕の思考を真つ白にして行く。

「……………」

「……………」

夏先輩がいきなり僕に抱きついて? これは夢? なんでいきなり?

あの話の流れでこんな風になるの?

僕はあまりにも突然で、あまりにも唐突な夏先輩の行動に驚いたけど、とりあえず、このまま密着していると色んな意味で非常にまずい気がして急いで夏先輩を引き離そうとして。

「っっっ」

耳元で聞こえてきた夏先輩の弱々しい嗚咽。

「夏、先輩……………」

「っっっあ、うあああああああつあああ!」

塞きを切ったみたいに大きくなって、僕はそれをただ黙って聞くしかなかった。

「うつうつぐ、うあつああ」

いつまでも響く夏先輩の鳴咽に、僕はそつと背中に腕を回し優しく背中をさすった。

その時、素直に僕は思った。

どんなに綺麗でどんなに格好良くて、どんなに大人びていて憧れる存在だった夏先輩。

僕よりずっと背が高いはずの夏先輩の背中とは、思っていたよりずっと小さくてずっと儚くて。

やっぱり女の子だ。

「うあああつ、うぐつひぐつう、あああつ！！」

「……………たくさん、たくさん泣いてください」

泣きじゃくる夏先輩に背中を少しだけ……………本当にほんの少しだけ強く抱きしめる。

夏先輩はそんな僕の言葉に押されるように声を上げて泣いた。心に満ち溢れていた色んなモノを吐き出すように。

雲一つなく夜空に輝く星の光に照らされながら、僕は考えていた。顔だけで後ろを振り返って、僕のベットの上で泣き疲れて眠っている夏先輩を眺める。

「……………幽霊、か」

そう、幽霊。

普通幽霊っていうの何か生前にやり残したことがある人や地縛霊みたいに誰かに恨みを持つてる人の2パターンのどっちか。

夏先輩を見る限り、どちらかというと前者のような気がする。

一日だけだけど、夏先輩を見てそう思った。誰かへの恨みとか憎しみ、怒りとかで成仏できていない幽霊は皆、言葉とか感情っていうよりは存在感とかで暗い感じがする。でも、夏先輩からはそんな感じがしない。

多分、成仏しないといけないんだろうけど……夏先輩の未練、夏先輩の場合は悩みつつ言う方が近いのかな。

僕は小さくため息をついて、ほんの少しだけ痛む右眼を押さえた。
「明日お祖母ちゃんに相談してみようかな」

僕なんかよりだいぶ幽霊に対して詳しい感じだし、相談することは間違いじゃ無いはずだから。

僕はもう一度ため息をついて、夜空を静かに眺めていた。
でも、僕は気づかなかつた。

「……………見つけた」

闇夜に溶け込むように黒の外套に身を包んだ人影に。

——4月29日——

一番最初に思ったのはこれは夢だと思った。

暗い、暗いだけの世界。感覚的には何も感じていないのに、まるでそこにいて体験しているみたいな現実味。

ただ『視』ることしか出来なくて、ただ理不尽に受け入れることしか出来ない夢の世界。

「……………あつ」

周りの景色が変わった瞬間に両目を塞ぐ。

この先は絶対に『視』たくないのに、両目を思いっきり閉じて眼が破裂しそうなくらい両手で押さえても脳に直接映像が流れ込んで来る。

状況的にはそんなに難しくない。

場所は家の近くの公園。そこにいるのは小さい頃の自分と母さんと、長い銀髪の女の人。

そう、これだけならなんの変哲も無い普通の光景なんだ……銀髪の女性が自分の身長より大きい鎌で母さんを串刺しにしていなければ。

小さい頃の自分はそれをただ眺めていただけ。

そう、眺めることしか出来なかったんだ。

「母さん!!」

母さんを助け出そうとして伸ばす手はいつも見慣れた自分の部屋の宙を掴むことしかできない。

「……………また」

体中から嫌な汗が滲み出て、うっとしいくらいに怠さを感じる。

「なんでいつもこの夢なんだか……………」

ダダをこねる我が儘な子供みたいに激しく脈動する心臓。

僕は胸を押さえ、深く息をついた。

この夢をみたあとは決まって良くないことがおこる。

「……………」

「凜!!」

「うわっ!?!」

突然耳元で鼓膜を破る気満々の大声が飛び込んできて、

「朝よ!! もう8時過ぎてる!!」

「いきなりどうしたんですか? 夏先輩、8時過ぎてるって……何か用事でもありましたっけ?」

僕はキーンツと耳鳴りする右耳を押さえながら、僕の少し上に浮いている夏先輩を見上げた。

僕が呑気に答えたせいにか、夏先輩はプクツとほっぺを膨らませて枕元似合った目覚まし時計を指差して言った。

「もっつ!! 8時過ぎてるのにそんなにのんびりしてたら学校に遅刻するわよ!!」

「学校って……」

僕はそのフリーズに小さく笑ってしまい、

「何で笑うの!?!」

「いや、だって夏先輩。昨日からゴールデンウィークですよ」

「へっ? ゴールデンウィーク?」

夏先輩は目を丸くパチパチさせて、

「はい、また明日は学校ですけど5月5日まで学校は休み」

「そ、そうだったね。ごめん、私の勘違いで起こしちゃって……」

……

起こされたこっちが申し訳なくなるくらいに肩を落として落ち込んでいた。

僕はまた小さく笑って、「気にしないで、夏先輩。いつもはもう少し早く起きてるから今起こしてくれて逆に助かったほうだから」夏先輩に軽く頭を下げた。

休みの日でも僕は普段通り6時には起きている。今日みたいな日が逆に珍しいほう。

布団をたたみ、ベットから降りる。どっちにしろ、あんな夢み

たあとに二度寝なんて絶対出来ないし。

「さてと」

僕は水色のパジャマを脱ごうと衿元のボタンを外そうとして。

「……………夏先輩」

「ん？どうしたの？凜」

ほっぺたが少し少しだけ熱くなる感じがわかって、きつと少しだけ顔が赤くなってるんだと思う。

「……………その、着替えたいんで」

僕は照れながら苦笑いで夏先輩にお願いして、

「あつ、ごめん。少し外に出るね！！」

夏先輩は顔を赤くして慌てて壁をすり抜けていった。

「……………？」

何だろう？少し残念そうだった顔してた。

それから僕は3分と掛からず着替えを終え、夏先輩に声を掛けながら部屋を出た。階段を下りながら一階のリビングへ。

「朝ごはん？」

「はい、朝は毎日食べるようにしているので」

僕と夏先輩が二人でリビングに入るとそこには。

「ん？」

淡い藍色の着物を着た僕と同じ紫色の髪と瞳の女性がいた。背丈と見た目でいえば僕と同じ、まあ小学生みたいな人がいた。

「凜、起きたのか？今日は寝て過ごすのかと思つたとぞ」

「ちよつと寝坊」

「おぬしが珍しいの」

湯呑みをゆつくりテーブルに起き、その人は立ち上がった。

「鮭の塩焼きと味噌汁があるぞ、食べるか？」

「うーん、食べる。」

「そうか、なら座って待つとれ」

「ありがとう」

僕はその人に促されるまま椅子に座り、

「ねえ、凜」

「はい？」

横に浮いていた夏先輩の方を向いた。

「凜にこんな可愛い妹さんいたっけ？」

「妹？」

僕は夏先輩の言葉に首を傾げ、

「今、味噌汁よっそつてくれてるじゃない。少し喋り方がお年寄りみたいけど」

「ああ、この人は妹じゃないですよ」

夏先輩が何を言ってるのかやっとわかった。

「妹じゃない？じゃあ親戚の娘？」

「いえ、あの人は列記とした僕の」

「祖母じゃよ」

僕の代わりに答えるように味噌汁を置きながら、夏先輩を見つめる僕のお祖母ちゃん。

「っ！？えっ、わっ私のこと『視』えてるの！？」

「そりゃあ、服のシワまでバッチリとな」

お祖母ちゃんは見た目通り悪戯っ子みたいに得意げに笑って。

「初めましてじゃな、幽霊さん」

次に鮭の塩焼きを置き、少し大きめの丼によそったご飯を置き名乗った。

「ワシは萩月蘭、小奴の祖母じゃ」

「おば、お祖母さん！？」

「同じみの反応じゃの」

お祖母ちゃんは予想通りと椅子に座り、湯呑みを持つ。

「こっ見えてももうすぐ80になるぞい」

「嘘……………」

「はは、びっくりしてる」

僕は驚く夏先輩をよそに味噌汁を啜って、

「お祖母ちゃん、今日は仕事？もし時間があるならちょっと手伝っ

て欲しいことがあるんだけど……」

上目遣いでお祖母ちゃんに視線を送って。

「そうなのかえ？可愛い孫の頼みとあつては断れんのう……と言いたい所じゃが今日は先約があつてのこれから出かけなければならんのじゃ」

「そうなんだ……残念」

僕は少し拗ねるようにご飯を一口食べて、鮭の身をほぐしていく。

「一応、話だけでも聞いておこうかの」

「ありがとう、お祖母ちゃん。まあ話つてのは」

「その娘さんじゃろ？」

「うん」

一旦箸を置き、夏先輩の事を話す。

夏先輩の事と言ってもここ2、3日の事で夏先輩が通り魔に襲われたこと。葬儀の事、そして昨日現在の事ぐらい。

話が終わって思ったのは僕は学校でよく話をしたりするけど、あまり夏先輩の事を知らないなあって思った。

「……………そうか、それは悔やみ切れんのう」

まるで自分の事のように悲しむお祖母ちゃん。

「いえ、私はもう気にしてませんから」

そんなお祖母ちゃんを励ますように笑って見せる夏先輩に少し心が痛くなった。

「大体の事情はわかった。ようは夏子さんを成仏させたいんじゃない？」

「うん」

「少し厄介じゃの……」

「厄介って……………」

お祖母ちゃんは夏先輩に顔を向けて、

「夏子さん、おぬしの未練……思い残したことは何じゃ？」

「えっと……………」

「いきなりそんなこと言われたって、言いにくいことだったら言え

ないよ」

僕は答えに戸惑っている夏先輩に助け舟を出して。

「夏先輩も無理に答えなくてもいいよ、成仏するのって結局は夏先輩が決めることだから」

「ちがうのよ、凜」

「え？」

夏先輩は全くといっていいほど感情の消えた顔で僕に言った。

「言いたくないとかそんなのじゃないの、ほんとに自分でもわからないの」

「わからないって……」

「そう、それが厄介なんじゃよ」

お祖母ちゃんは腕を組んで、眉間にシワを寄せた。

「人は死ぬ直前に人生の走馬灯を見るんじゃ」

「そうみたいだね」

「はい」

お祖母ちゃんが話し始めて、僕と夏先輩はそれぞれ相槌をうった。

「ある種の記憶処理みたいなものでな、生まれ変わったときに出来るだけ記憶を受け継がないよう、この場合は心と言った方が近いの」

霊体になった者は一時的に記憶の保管庫になっており、ある程度の自我を保って存在する。

「何故、未練を思い出せないか、忘れてしまうのというじゃない」

視線だけを夏先輩に戻して、僕もつられて夏先輩を見つめる。

「夏子さんにとって一番知られたくない、誰にも知られちゃいかん記憶。それが未練になって霊体になる。地縛霊は自分で未練を果た

せず、成仏できない霊じゃな」

「じゃあ、もしこのまま未練を果たせなかったら……」

「例外なく皆、『地縛霊』になる」

「そんな……」

口元を両手で覆い、驚きを通り越して青ざめている夏先輩に、

「まあ、そんなに心配しなくても大丈夫だと思いますよ」

僕は正反対に落ち着いた口調で話しかけた。

「そうならないように僕やお祖母ちゃんがいるんだから……ねっ、お祖母ちゃん」

「凜……」

夏先輩は黒目がかった大きな瞳を潤ませて嬉しそうに笑ってくれた。

「ワシから一つアドバイスじゃ」

お祖母ちゃんもなんでかわからないけど僕を嬉しそうに見つめながら、人差し指を立てた。

「何？」

「未練を探すには思い入れの強い場所を歩き回ったり、仲の良い人物を尋ねてみたり大切な物だったりを探してみると良いぞ」

「場所に人か………ありがとう、お祖母ちゃん。せっかく長い休みもあるし探し回ってみるよ」

「それがよいじゃろ」

お祖母ちゃんは満足気に笑って席を立った。

「それじゃワシは出掛けて来るぞ、戸締まりと火はしっかりするんじゃないぞ」

「うん。いつてらっしゃい、お祖母ちゃん」

そう言っ僕はお祖母ちゃんを見送って、残っていた朝食を手早く済ませようとして。

「凜……」

申し訳なさそうに夏先輩が僕を見ていて、

「何？夏先輩」

僕は箸を止める。

「折角の休みなのに……いいの？何か予定とか」

「得にないですから気にしなくても大丈夫ですよ」

「でも………」

「………夏先輩」

僕は少しだけ声を低くして、夏先輩に言った。

「今、一番大切なのは休みをどう過ごすかよりも夏先輩を助けてあげること。僕の休みよりも何十何百倍も大切だよ。だから大丈夫」

僕の言葉を信じられないと言った感じで驚いた顔を見せた夏先輩でも、すぐに満面の笑みで。

「ありがとう、凜」

と、嬉しそうに言ってくれた。

僕はそれが恥ずかしくて照れ隠しにご飯をかきこみ、夏先輩は反対側に移動して来て僕を眺める。

「ご飯美味しい？」

「美味しいですよ」

僕はぶっしつに答えたけど、夏先輩は嬉しそうに僕がご飯を食べるのを見ていて少し……いや、かなり恥ずかしかった。

「とりあえず、商店街を回ってみましょうか」

「そうね、よく買い物とか遊びに来るし」

朝ご飯を済ませた後。僕と夏先輩は商店街に来ていた。

商店街はゴールデンウィークということもあって混雑しているかなあと思っていいたら案外空いていた。

比較的この町は田舎の部類に入と思う。人通りやお店の数は少なくはないと思うけど特に目に引くものもないし、軽い買い物や遊びには困らない。治安もそれなりに良いと思っていた……最近までは。「何も代わり映えないけど……どうですか、何か思い出せそうですか？」

僕は隣にいる夏先輩に話しかけた。

「全然、なにも」

「そうですか……まっ、いきなり見つかるとは思ってませんでしたけど」

「でも」

「でも？」

夏先輩は「フフツ」と小さく笑った。

「初めてだなあーって」

「何がです？」

僕ははしゃいでいるように見える夏先輩に首を傾げて、

「凜と買い物来るの」

「はあ……………確かに初めてですけど」

「ウフフツ！！」

もう一度にやける夏先輩。

よくわからないけど、夏先輩嬉しそうだし……………まっ、いつか。

僕は正面に向き直して、商店街を見回す。

「……………ツ」

右眼に『視』える景色に少しだけ戸惑った。

人と幽霊って見分けるの疲れるんだよねあ。

人と人がぶつかり合うはずの風景。人が混じり合う様に『視』

える光景はいつ『視』ても気持ち悪くなる。

————ズキツ。

「ん……………っう」

右眼に感じる焼けるような感覚。

「どうしたの？凜」

ほんの少しだけ顔を歪めたただけなのに夏先輩が、怪訝そうに問い掛けてきた。

「……………いえ、何でもないです」

「そう？」

「はい」

これだけ靈魂を『視』続けるのは久し振りだからかな。少し痛み

がいつもより強い気がする。

「一通り見てまわりましょうか？」

「そうね、ウインドシヨップिंगでもしながら歩きましょう」

夏先輩はもう全く気にしていないみたいで宙をスイスイと泳ぐように浮いていく。

それが無邪気な子供みたいで思わず、笑ってしまった。

「夏先輩、僕は飛べないんですからもっとゆっくり」

「ーズキツ!!」

「ぐっ!?!」

それは突然だった。右眼を槍で貫かれたような激痛が走って、瞬だけ意識が飛んだ。

「く……………う、ぐうつ」

足元がフワフワとした感覚に歩いている実感がなかったけど、痛みに耐えながら商店街の脇道に逃げた。

「ねえ、凜……………って」

夏先輩は僕の様子に気がついたみたいで、一っ飛びで僕のところへ飛んで来てくれた。

僕は商店街の脇にある噴水公園に何とかたどり着いて、ベンチに前のめりに滑り込むように倒れた。

「ねえ!! 凜!! 大丈夫!?! 目が痛い!!? ねえ、凜ってば!!」

夏先輩が何か僕に言ってる。でも、何を言ってるのかわからないよ。

右眼を襲う激痛に僕は完全に余裕をなくし、夏先輩に大丈夫と笑いかける事すら出来ない。

「ぐあ、ぐうつうつ」

痛みの間隔が速くなってきてる。何か近づいてきてるみたい。痛みが更に強くなって、

「あっ……………」

余りにも唐突に痛みが消えて、変わりに言いようのない圧倒的なまでの圧迫感が体全体に重くのしかかって来た。

「……………夏先輩」

「凜！？大丈夫！？」

「なん、とか」 やつと言葉に出来た自分の声に一気に思考が冷静さを取り戻してきて。

「早くここを離れましょう……………なにか嫌な感じがします」

「嫌な感じって……………っ！！」

夏先輩が喋っている途中だったけど、そんなこと気にしていられなかった。

早くここから離れないと！！

今朝みた夢がフラッシュバックする。

母を貫く大鎌、銀髪の女性。

「早く！！」

夏先輩の手を乱暴に引いて、公園から離れようとして。

辺りが暗く、いや黒く包まれていく。

「なっ！！？」

「何！？」

僕達を中心に円状に囲うように黒い壁が地面から突き上がり、

「かはっ！！！」

僕と夏先輩以外の笑い声が短く上がった。

「誰！？」

僕は夏先輩を背にして、声の主を見た。

そこにいたのは中肉中背の20前半の男。見た目はどこにでもいそつな優しい顔付きをした人で、今は口元を押さえて笑いを堪えているように見えた。

「あのあなたは」

誰？ともう一度質問しようとして、さっきと同じくらいの拷問されているような痛みがまた右眼を襲ってきた。

長く続いた高笑いが興奮の言葉で止まった。

「……………っ」

「……あの人」

男の人は手で顔を押さえて黒く染まった空を見上げる。

「殺した奴を殺した後でも殺せるなんて俺は幸せ者だぜっ!!」

「殺した後には殺すって……………っ!!」

僕はその言葉に夏先輩に顔を向けて、夏先輩は震える体を抱きしめて男の人を見ていた。

「……私を殺した人」

「くっ!!」

僕は顔を正面に戻して、男の人を睨みつける。

こいつが夏先輩を。

「そのガキは生きてるのかぁ……………」

男は僕に粘っこい視線を向けて、

「ってことは今と後で2回殺せるってことかぁ!!」

男は喜び勇み、ズボンのポケットからナイフを取り出し、僕達目掛けて走り出す。

「そこじつとしてろ!!サクッと殺してやつからよおっ!!」

「くっ!!させるか!!」

男は僕に粘っこい視線を向けて、男は喜び勇み、僕は犯人との間合いを自分から詰め、

「凜!？」

「夏先輩はそこにいて!!」

出来るかぎり、体を自然体に近づけようと力を抜く。

夏先輩の事件を思い出してみた。

——通り魔——。

相手は確実に人を襲い慣れてると思った方が戦いやすい。

「フッ!!」

犯人はナイフを出鱈目に振り回して、僕はナイフを攻撃をかい潜つてもう一度懷に飛び込む。

「もう一回吹っ飛べ!!」

犯人に顎目掛けて思っい切り拳を振り上げる。

「くはははっ!!」

「なっ!？」

確実に顎を捕らえるはずだった一撃は空振りに。そして振り切った次の瞬間には。

「何度も喰らうかよ」

犯人の下品な笑い声が耳元で響いく。

「ぐ……あっ、ぐう」

右の脇腹に鋭い痛みが襲い、

「……く、うあっ!!」体を捻って背後に回し蹴りを放った。

でも、そこには誰もいなくて。

「くあははっ!!どうだ?クソガキ。少しずつ体を切り刻まれていく感じは」

僕を馬鹿にするように少し離れた所で宙を泳いでいた。

「……く、幽霊は」

「空間に溶け込めて楽で良いぜ」

迂闊だった。僕が触れることは出来ても、相手が幽霊っていうのは変わらない。物は擦り抜けられるし、空だって好きに飛べる。逆に普通は幽霊から人間に触ること、ましてや攻撃なんて出来ないはずなのに僕が触れることで幽霊からの攻撃スイッチがオンになってる。

「くっそ……………うぐっ」

ブレザーに血が滲み出して、

「凜!!」

夏先輩が慌てて僕の隣に飛んできた。

「凜!!血が!!」

「な、夏先輩」

最悪だ。この状況を打開するには僕が万全の状態で犯人の相手を

しなきゃいけなかったのに。

今起こっている現象は確実にあの犯人が原因だ。それを辞めさせようとしても話し合いでどうにかなるような相手じゃないのはわかってる。幽霊だから怪我だって直ぐに治るし、急所を攻撃しても足止めにもならない。

だから僕が唯一とれる行動は相手が諦めるまでノーダメージで戦いつづけること。これが正解だったのに……。

「さあ、たつぷりと痛ぶって捌いて殺してやる。死んだ後も何度も何度も何度もっ！！お前の魂の『在力』が切れるまで何度でもなああああああつ！！」

完全に欲求を満たすことしか考えてない。ここで僕が死んだら多分、魂の具現化。幽霊になるのに少し時間が掛かるはずなんだ。その間、運が良ければ犯人は僕の死体を切り刻んでいてくれるかもしれない。でももし、犯人がそうしなかったら……………。

「凜！！早くここから逃げないと」

「多分、無理です」

「何で！？」

夏先輩は僕の肩を担ぎ、僕はそれを支えに立ち上がる。

「多分、今僕と夏先輩がいる空間は別空間になってます」

僕はあくまで憶測で話を進めていく。

「もし僕が周りから見えているなら、いくら人通りが少ない公園でも何度か叫んでますからちよつとした不審者に見えるはずなんです」

幽霊が『視』えるのは僕だけ。その僕が公園いる状況は僕には三人でも、他の人からは僕一人にしか見えない。

「結構時間が経ってますけど誰も来ないところをみても、別空間だと思っています」

「そんな……」

夏先輩はどうしたらいいのと絶望感みたいなもの感じているのか焦りを見せ、

「大丈夫、ですよ」

僕は夏先輩から離れ、犯人と向き合う。

「凜？」

夏先輩は不安そうに僕の名前を呼んで僕は首だけ振り返って本の少し強気で言ってみた。

「夏先輩は、僕が死んでも護ってみせますから」

そう言って正面を向き直す。

夏先輩の顔を見るのが恥ずかしかったのもあるけど、今は目の前の敵に集中しないと。

「取り合えず目玉えぐり出すかあああああつ！！」

「痛いのは嫌いなんですよね！！」

左眼を狙ったナイフ。僕はそれを持つ右手と衿元を掴み、腰を落として背負う。

「はあああああつ！！」

犯人を背負い投げ、たたき付けずに宙へ向けて投げる。

「ぐうつ！！」

刺された脇腹の痛みに膝から力が抜けそうになったけど、気力で押し伏せる。

僕は投げた体勢から右足を軸にそのまま下段左後ろ回し蹴りを犯人の顔面に繰り出す。

右眼と脇腹の痛みを完全に無視しての一撃。でも、その一撃を蹴り抜いた反動で膝から力が抜けてその場で倒れ込んでしまった。

「ぐうつ……はやく、立たなきゃ」

僕は犯人の姿を探しながら起き上がろうとして、

「ぎつ！？」

左肩に鋭い痛みと背中に鈍い衝撃が襲ってきて。

「良い様だなあ、クソガキ！！」

快感！！といった感じの笑顔で犯人が笑って僕の背中に馬乗りになっっていた。

「ぐうつ……ぐ」

左肩にはつきり感じるナイフの刃の形。

「重いから……どいてよ」

「嫌だね」

悪戯つ子みたいに舌を出してナイフを乱暴に引き抜いて、

「良い声で鳴いてくれよおおおおおおおつ!!」

快感を求めてナイフを振り下ろした。

「ぎっ、あがあああああああああつ！！」

「くははははははっ！！良い声だ！！感じ過ぎる良い声だ！！」

僕の声に興奮し始め、犯人は何度も何度も、何度も何度もナイフを突き立て、えぐる。

その度に僕の意識は削られて、

「あつあ……あ……つ」

[illegible]

満足気に犯人の高笑いが少しだけ聞こえてきた。

まずい、もう体に力が入らない。

穴だらけのブレーザーにその穴から溢れるように滲む赤い血。もう、土も飲みきれないみたいで僕を飲み込むように血だまりが出来ていた。

もう何も感じない。あれだけ背中を滅多刺しされていても痛みも感じない。これが死ぬって言うことなのかな。

「壊れかけだな、今樂にしてやるからな」

犯人は「とどめだ」とナイフを振り上げて、

「凜！！」

視界の端に夏先輩が見えた。

僕を助けてくれようとしてるみたい。でも間に合わない。

犯人は僕の後頭部目掛けてナイフを振り下ろし、僕はなけなしの意識で願った。

僕が幽霊になるまで無事でいて。

「くたばれえええええええええええええええつ！！」

「りiiiiiiiiiiiiんんんっ!!」

夏先輩の絶叫じみた声に犯人の欲求を込めた一撃が僕の後頭部を貫く瞬間まで、せめて犯人を睨みつけてやろうと犯人の方に視線を向けた時だった。

「全く、情けないわね」

どこまでも澄んだ綺麗な声。その声がこの場の全てを見下すように冷たく響いた。

その瞬間、何かが碎けるけたたましい音と一緒に体に感じていた圧迫感が消えて。

「ぐっ!!?ぎゃあああああああああっ!!」

犯人の突然の絶叫。犯人は僕の正面から大分離れた所で頭を抱えながらのたうち回っていた。

「……………あ」

誰?と呟いたつもりだったが、口から出てきたのは鉄臭い赤い血だけ。

「すぐあのゴミを片付けるから、ちょっと待ってなさい」

声はするのに姿が見えない。

「ぐうっ!!あああああああっ!!いきなり出て来て俺の邪魔すんじゃないね!!このクソアマ!!」

もう、犯人の姿も見えなくなってきた。

「下級地縛霊ごときが私に勝てると思ってるの?」

完全に犯人を馬鹿にしている声。

「凜!!」

夏先輩が滑り込むように僕の隣に座って、

「凜!!しっかりして、凜!!」

「夏…先輩……」

僕を抱き起こして必死に呼び掛けてくれる。

僕はそこで声の主の姿を見ることが出来た。

犯人と対峙している一人の少女。

目の覚めるような煌めく長い金髪をツインテールにして、少しつり目気味の青空みたく澄んだ大きくて丸い碧眼。背丈は夏先輩より少し低めにみえる。容姿にいたっては夏先輩にも負けなくらいの美少女。

「魂威解放」

右手から淡い紅い光が瞬いて、

「……『ソールイーター』第三位解放」

女の子背丈と同じくらい黒い大鎌が現れて、女の子はそれを軽々と肩に載せる。

「そんな馬鹿でかい鎌にビビるかよ！！すぐお前もそのクソガキみてえに」

「無理よ」

「んだと！？どうしてそんなことが言えんだよ！？」

「だって」

女の子は冷めきった声で目を閉じて、犯人に背を向ける。

「なっ！？」

犯人の表情が驚きと恐怖で凍り付いた。

体を縦に切り裂くように鮮血が飛び散って、

「終わってるもの」

最後の断末魔の声さえあげることも出来ずに左右に別れ、崩れ落ちる。

「……………っあ」

その光景に僕は終わったんだと気が緩んでしまって、暗い闇に意識が溶け込んで言った。

意識が途切れる寸前。女の子がこっちを振り向いて、鎌を握り直してこっちに向かって歩きだした。

大鎌片手で握り刃を返す姿に今朝みた夢が頭の中を駆け回って、夏先輩の名前を呼ぼうとして。

「……………あつ」

抵抗する間もなく意識が完全に途切れた。

僕が覚えているのは夏先輩が泣いて、僕を呼んでいる姿だった。

——4月30日——

「……………ふうっ」

青空に向けて無気力にため息をついてみる。

「……………もう、何がなんだか」

青空に虚しく響く僕の声。それが自分がいるのは現実なんだと教えてくれる。

学校の屋上で僕は今、僕がおかれてる状況を分析してみる。

今の時間は8時25分。ちょうど丸一日経った計算だ。

今朝、起きた時は僕の部屋だった。

犯人に襲われて死にかけていた筈なのに体は無傷。どこにもあの時の怪我の跡はなかった。

「凜!!」

足元から声が聞こえてきて、

「夏先輩」

床からにゅるりと夏先輩が姿を見せた。

「探したのよ、屋上に行くって言ってくれば良いのに」

「……………いや、今朝起きた時にお願いしたこと覚えてますか？」

僕は夏先輩をジトーツと睨みつけて、深くため息を着いた。

「ええ、覚えてるわよ」

そう言つて夏先輩は腕を組んで左の人差し指を立てて言った。

「なるべく学校では話し掛けられないように、でしょ？」

「……………おぼえててくれるならなんで」

「べつに良いじゃない、今は凜しいないし」

「まあ……………そうなんですけど」

一人で考えたい事があつただけ……………仕方ないか。授業中にでも考えよう。

「夏」

先輩、と言いかけて授業の予鈴の鐘が鳴った。

僕はそれに小さくため息をついて、夏先輩に背を向けて屋上の出入口に向かって歩く。

「出来るだけ右眼は『視』えるようにしておきますから、何か用事があつたら来て下さい」

「……………うん」

夏先輩はどこか寂しそうに頷いて、

「心配はないと思いますけど……………なるべく僕から離れすぎないでくださいね」

僕は念を押すように夏先輩の方を振り返る。

「うん、また昨日みたいなことがあるかもしれないしね」

「それじゃ、僕もう行きますね」

僕は夏先輩に軽く手を振って屋上を跡にした。

それから僕は普段通りに教室で朝のホームルームが始まるのを座って待っていた。

「……………」

教室は見慣れたクラスメイト達が楽しげに話をしていた。

気になるテレビと服。気に入らない先生がどうだこうだと、男女関係なく恋話に話をしていた。

僕はそれに交じることなく、ただ一人で窓際が一番後ろ端の自分の席で机と睨めっこをしていた。

一昨日夏先輩のお葬式が終わったばかりなのにどうして笑ってられるんだろう？皆、結構薄情……………ううん、大人なのかな。

「……………」

皆の雑談が少しずつ遠退いて、完全に聞こえ無くなる。

昨日、僕が意識を失った後の事を夏先輩に聞いてみた。

犯人をたった一撃で切り捨てたあの金髪の女の子。

その娘は僕の傷を治してそのまま何も言わずにどこかに行ってしまったらしく、目的は犯人だけだったのかもしれない。

「……………」

何だろ、凄く胸の辺りがモヤモヤする。

あの女の子を『視』た時にも感じた嫌な感じ。心臓をわしづかみにされたような息苦しい感覚。

「……………」

ここ最近ずっと見てるあの悪夢。

「は……………きっ」

母さんを貫いて、母さんの血で染まった大鎌。

「……………ぎっ」

それを何もできずにただ見ることしか出来なかった僕。

「は……………づき」

嫌でも考えてしまう。

「はぎ……………き!!」

僕には夏先輩を護れないかもしれない、って。

僕は自分の中の不安をはき出すように大きく息をはいて。

「おい!!萩月!!」

耳元で響いた妙にドスの聞いた女の子の声。

僕はそれに肩が跳ね上がって、

「うわっ!!?」

「うわっ!!?じゃない!!」

僕はその声に慌てて正面に仁王立ちしている同級生の顔を見上げた。

「な、なに?」

「なに?じゃないわよ」

背丈は僕より少し高いくらいの女の子の同級生が話し掛けてたみたいだ。

さっきと同じようなやり取りをして、僕は苦笑いで答える。

女の子は呆れ顔のため息について、黒い大きなファイルを僕の目の前に突き出してきた。

それには白いシールに達筆な字で『日誌』って書いてあった。

「日誌?」

「萩月、今日はアンタが日直でしょっ!早く先生呼んできてよ」

「へ？そうだったけ？」

僕はほつぺを掻きながら愛想笑いをして、

「ったく、ほら早く先生呼んできて……ん？萩月ってさ」

「ん、何？」

女の子が僕の顔を覗き込んできて。

「右眼。いつもと色とか瞳の形、変わらない？カラーコンタクトとか何か？」

僕は女の子の質問に思わず右手で隠して、

「う、うん。いつもがカラーコンタクトなんだ、今日はコンタクトするの忘れちゃって……はは、少し気味悪いでしょ」

ちよつと固かったけど笑って答えた。

僕は「そうね」っていう答えが帰ってくると思って少し身構えたけど、女の子はポンと軽く答えた。

「全然、猫みたいで可愛いと思うけど？」

「そ、そう？」

「ええ、まあ人それぞれだと思うけど私は気にならないわよ」

「そつ、なんだ……」

僕はその答えに気が抜けた返事が出て。

「いいから、先生呼んできなさいよ。うちの担任は時間守らないんだからさ」

女子生徒の怒鳴り声にクラス中の視線が僕に集まって。

「はい！すぐ行きます！！」

我ながら素早い！！と思うくらいの早業で席から立ち上がって教室を出た。

廊下の壁には「走るな」って書いてあった貼紙が貼られていたけど、僕はそれを無視して走る。

「……………」

あの女の子、人間じゃない。多分、僕の予想通りなら。

「あつ……」

僕はあることに気がついて足を止めて、後ろを振り返った。

「…………職員室、こつちじゃなかった」

お祖母ちゃんに作って貰ったお弁当と購買で買った紙パックのお茶を膝の上に広げて両手を合わせる。

「いただきまーす!!」

呑気な声が空に響いて、

「……………」

僕を突き刺す痛い視線。

「……………えっと」

「どうぞ、気にしないでお昼ご飯食べて。私は食べれないけど」
嫉み全開の声と笑顔で言われると……………食欲が無くなる。

夏先輩は生前はかなりの大食いとしてこの辺りでは名前が知られていた。

商店街の食堂のメニューを一人で全部食べるのは当たり前、某番組の大食い選手権では各ステージ事に驚異的記録を残し当時の大食い女王を難無く撃破。ほぼ一人舞台で、次回番組参加のオファーが来てたみたいだけど断つたらしい。

断つた理由が「もっと楽しく食べたい」と言う理由だった。

幽霊になったから食べ物なんて食べる必要がない、というか物に触れられないから食べられない。それが目の前でご飯を食べられたらそれは腹が立つんだろぅなぁ、と思う。

「こればかりは諦めてください」

「ふんっ!!」

夏先輩は拗ねたのかそっぽを向いて、僕はため息混じりにご飯を一口口にする。

僕は夏先輩を横目でチラッと見る。

（まあ、食べられないことはないんだよなぁ……………でも、それは絶対に夏先輩はしたくないだろうし、僕だって気まずい）

申し訳なさを押し殺して、黙っていようと決めた。

結果的にはこれがどっちに対しても最善だと思う。

僕は早く済ませようと黙々と食べ進めて、夏先輩は僕の横で「う

「ん」と眉間にシワを寄せて唸っていた。

「……っ……ん」

僕が半分くらいお弁当を食べ進めた辺りで、

「あー……っ！……わかった！……」

夏先輩が飛び出すように勢いよく立ち上がった。

「ど、どうしたんですか？夏先輩」

僕は突然の事でちよつと驚いたけど、夏先輩は気味が悪い満足げな含み笑いを僕に向けて。

「んふふっ……！」

「……夏先輩？」

何だろ？物凄く嫌な予感がある。

「私、物には触れないけど凜には触れるんだよねー……っ」

「そ、そうですけど？」

やばい、夏先輩もしかして気づいた？

僕は背中から汗が吹き出して、

「私、『口移し』なら食べられと思うんだよね」

夏先輩はわざとらしくほっぺを赤くして自分の唇に人差し指を沿える。

僕の嫌な予感は当たらずにいい時に良く当たるんだよね。

「……まあ、食べられないことはないと思いますけど」

背中から滝のように流れる汗を感じつつも、表情は平静を死に物狂いで保つ。

「ねえ、試してみよう？」

「そうですねえ」

僕は夏先輩の提案を無視して、少し食べる速度を上げる。

最初は夏先輩は余裕の表情で僕を見つめていたけどただ黙々とお弁当を食べ進める僕の様子に少しずつ焦りが見えてきて。

「ちよっ……り、凜？私、お弁当食べられるか試してみたいんだけど……」

「んくっ………もぐ、ん、そう………ですね」

僕は夏先輩を全く気にせず更に食べ進める速度を上げる。

「ちよっ！？凜！！」

夏先輩は僕がお弁当を食べ進めるのを邪魔しようとして手を僕の口元に当てようとして。

「んぐっ、はっ！！」

僕は無意識に気合いの声を上げて残りのご飯とおかずを一気に口にねじ込んで、

「ごふっ、んぐっ！！」

口から漏れそうになるご飯を両手で押さえ込んで無理矢理飲み下す。飲み下した後は思いつきり咳込んで、買っておいたお茶を同じように一気に飲み干した。

「……………はあっ！！く、苦しかった……………」

僕はお弁当という難敵に勝ったという確信と夏先輩の提案を阻止した安堵感でいっぱい。

もう一息、息をつこうとして首を握り潰されそうくらい思いつきり絞められて。

「ぐえっ！？」

「凜のバカ！！何で全部食べちゃうのよ！？」

夏先輩は大きな瞳にうつすらと涙をためて、僕の頭をブンブン振り回す。

け、頸動脈が絞まって！？ま、まずい！！本当に落ちちゃう！！
「そんなに私に飢え死にしろっていうの！？凜は私にご飯食べられなくても良いっていうの！？」

「いやっ、もう死なないし……………というかもう、食べなくてもっ！？」
い、意識がつ。

僕は徐々に薄くなっていく視界に危機感が膨れ上がって、

「ぐっ、も…もう、限界！！」

「へっ？」

夏先輩の両手に手をかけて無理矢理引きはがしながら体をねじって、コンクリートの床に転がるように倒れ込む。

「ゴホッゴホゴホッ!!」

解放された頸動脈に血が流れる感覚と酸素を吸収している感覚に生きてる実感を感じて、肺を満たしてくれた酸素を二酸化炭素にして全力で叫んだ。

「僕を殺す気ですかあああああつ!？」

「だつ、だつて凜が私にご飯食べさせてくれないから……その、つい」

夏先輩は申し訳なさを感じてるみたいだったけど、まだ納得いつてないようで少し拗ねた感じで口を尖らせていた。

「僕の命と一食分のご飯は同じくらいですか!？」

「う、ごめん………」

夏先輩は肩をガクツと落として、僕はそれを呆れたように見詰めた。

「確かに夏先輩がご飯を食いたい気持ちは僕にもわかります。でも、いくら食べるのが好きで我慢でき無くてもですね、夏先輩だって女の子なんですから簡単にく、く……口移しなんて」

「い、嫌だった?私的にはかなり名案だったんだけどな」

僕の様子を伺っているのか、顔は遠慮気味に伏せて上目遣いで僕を見つめていた。

「いや、嫌っていつか」

抵抗があるのは事実だけど……良く考えれば幽霊とはいえ夏先輩はぶつちぎりで学校一のアイドルで、容姿端麗、眉目秀麗、清楚可憐ってどんな褒め言葉でも足りないくらい綺麗で。成績も学年トップで人辺りも良いし、炊事も家事も文句なしに完璧な人。そんな夏先輩と恋人でもないのにご飯を口移しで食べさせるなんて、はつきりいって夢物語。他の男子だったらきつと血の涙と鼻水を垂らしながら喜ぶんだろうなあ。

僕も年頃の男、そういうことに全く興味がないって言ったら嘘になる……けど。

僕が誰かを好きになる事なんて多分、ない。

誰かを好きになる、そんな感覚がわからないから。

生まれてこのかた、誰かを好きになったことがない……正確には家族とか友達としてはあるけど、たった一人だけ失いたくないっていうくらい好きになった女の子がいないんだ。

男子グループの話に出てくる可愛いとか綺麗とかっていう女の子の話の聞いても、可愛いとか綺麗の上がなくて、ただそこで僕の中で終わってしまうから恋愛感情にならずに終わってしまう。

夏先輩もそう、どんなに綺麗でも結局はただの他人になってしまふ。今、一緒に行動しているのだって夏先輩を悪霊にしたいくないっていうただのお節介から。憧れとか恋愛感情なんて一切関係な理由だ。

「嫌ではないですけど、夏先輩とそういうことをするっていう選択肢が僕には無いっていうのが1番近い表現ですかねえ」

長い葛藤の末、僕が出した答え。

「……………」

「な、夏先輩!？」

その答えに眉間にしわがれを寄せるどころか、ヒロインキャラとしてあるまじき鬼の形相と気迫を僕にぶつけた。

「……………」

「な、夏……………」

無言なはずなのに、圧倒的な叫びで押し潰されそうな感じ。

「……………」

もう駄目だ、何をいっても僕の人生には死亡フラグしか立たないよ。

さっきとは違う意味で汗が流れ出してきて、

「は……………」

もうすぐ僕も世界にサヨナラを言わなきゃいけないのかと覚悟した時だった。

「イチヤついてると悪いんだけど、少し時間もらっわよ」

場の空気なんて一切関係なく自己主張の塊のような声が聞こえてきて、僕と夏先輩はその声が聞こえてきた方向に振り向いて。

「なっ!？」

「あ、あなたは……」

そこに立っていたのは目の覚めるような煌めきを放つ美しい金髪の少女が不機嫌そうに立っていた。

「元気そうね、ひとまず安心ってどこかしら」

女の子は胸元に流れていた長い金髪を後ろに払って、小さく息をついた。

「っ……………」

僕は先輩を背に回して、女の子の正面に立つ。

今どんな顔してるかはわからないけど、きつと。

「そんなに睨まなくてもなにもしないわよ」

どんな対応をされても大した問題じゃない、自身地味な感じが伝わって来る。

「ごめん、でも信用できないよ」

敵意はない。そう敵意はないんだ。

「まあ、仕方ないか。普通はあんな状況にならないしね」

めんどくさい。そんな顔をして腰を抱えるように腕を組んだ。

「……………」

昨日、意識が消える前に『視』た光景が僕の中でこの状況の答えを出してしまう。

攻撃の軌跡が見えない速度での攻撃を出されてしまったら僕は何も出来ない。

「…………僕達に何か用？」

「あんた達、というよりはあんたの後ろにいる『ゲシユベンス霊現体』に用があるのよ」

「『霊現体』？」

「そつ。あんた達で言えば『浮遊霊』って呼んでるものかしら」

「……私に何の用？」

夏先輩は僕に隠れるように背を丸めて、女の子に問い掛けた。不安の大きさを示すように、握った手は真っ白になっていた。

「単刀直入に言うわ。あんたを生き返らせてあげる」

「なっ!？」

「生きかえ……って!？」

「何、大口開けてアホ面してんのよ」

「いや、だって……」

「……………」

夏先輩は疑うことなんて忘れて、驚いたなんてもんじゃない。今、女の子が言った言葉に思考回路が完全にパニックってる。

それもそのはずだ。死んだ自分が「生き返る」だなんて、世界が壊れて神様が世界を作り直さない限り出来ない事なのに。それをこの女の子はまるで瞬きをするくらい、息をするくらい当たり前に言っただんだ。

「あんたが死んだのはこっちだって『予定外』だったのよ。まったくこの誰だか知らないけどこっちの仕事邪魔しないで欲しいわ」

「仕事って？」

僕は出来るだけ平静を装って、金髪の女の子に話し掛けた。

「魂の管理よ、もっとわかりやすく言えばあんた達の寿命、運命決めるのよ」

「運命って……………」

その一言に言いたくない言葉が出てきた。

「なんで君が決めるのさ!？人の運命を勝手に決めないでよ!！」
「り、凜!？」

夏先輩が驚いてるのがわかる。でも、そんなことは今はどうでも

良かった。

「怒鳴られても困るのよねえ、それが仕事だし」

「仕事だって!？」

女の子はめんどくさそうに目を細めて、小さくため息を着いた。

「人の命を物みたいに扱って……その上、夏先輩が死んだのが予定外だって!？ふざけたこと言わないでよ!！」

「ふざけてないわよ、だって事実だもの」

「どうして君達はそんなに人の命を……っ」

「……『君達は』か、あんた私がおなのか知ってるみたいね」
「………知ってるよ」

話が早いといった感じに女の子は小さく笑って、

「凜、この子の事知ってるの？」

「正確にはこの子じゃなくて、この子の『存在』って言った方が良いのかな」

僕は奥歯を思いつ切り噛み締めた。

「………存在？」

夏先輩は不安そうな声で呟いた。

「あの女の子は……」

「『死神』よ、よろしく」

「し、死神って……あの魂を刈り取っていく死神？」

「ええ、そうよ。正確には生死を司ってる神よ」

「生死か………それでその死神さんはどうやって夏先輩を生き返らせるっていうの？」

僕は出来るだけ感情を抑えて、声を搾り出した。

「生きていた時間に時間移動する、っていうのが一番近い表現かしら。生き返らせること事態はそんなに難しくないわよ」

「ホントなの!？」

夏先輩は女の子に害意がないことを感じ取ったのか、僕の頭を抑えて身を乗り出すようにして興奮したような声で問い掛けた。

「ええ」

「じゃあ、早く」

夏先輩は興奮を抑え切れないみたいで僕の背中を乗り越えようと膝を乗せ、

「でも、条件があるわ」

「条件？」

女の子の言葉で夏先輩の動きが止まり、僕は一步前に出て女の子の話を聞いた。

「今のあなたは『未練』に縛られてるから、今のままだと『破壊』以外の魂操作を受け付けない状態だからまずは先に『未練』を解決しなくちゃいけないのよ」

女の子は夏先輩と僕に視線を交互に移して人差し指で僕達を指した。

「あんた達を襲った奴の親玉を殺さなきゃいけないの」

「僕達を襲った人のつて」

「その親玉のおかげでここら一帯の魔力のパワーバランスが崩れてて生き返らせる儀式ができないのよ」

女の子は面倒くさそうに溜息をついて話を続けた。

「『事象回帰』……それが儀式の名前よ」

「『事象回帰』……？」

「そつ、さっきも言っただけどこれはその『霊現体』の子が生きていた時間に戻るんだけど……ちよつと問題があつて」

「問題つて？」

「問題つていうのは」

女の子がそう喋り出そうとして。

——ゴーンッ——！！

遮るように始業の鐘が響いた。

「時間みたいね」

女の子は僕達に背を向けて、それと同時に右眼少しだけ痛みが走

る。

「ぐっ!？」

女の子を包むように黒い霧が足元から溢れて、

「こっちも出たみたいだし、また来るわ。話の続きはその時にするから、それまで普通に生活してなさい」

黒い霧が肩まで包み込んだ時だった。

「ま、待つて!!」

右眼を抑えたい衝動を堪えて女の子を視界にしっかり捉える。

「何？」

「名前……を」

痛みにつられて声がうまく出てこなかったけど。

「セフィリア」

「えっ？」

「セフィリア」ベェルフエールよ

女の子。セフィリアはそう答えて、

「覚えておきなさい」

そう言つて黒い霧に包まれて消えた。

屋上の出来事から12時間が経つて家に戻つて来た。僕達は一階のお祖母ちゃん和室の畳の上で僕はあぐらを、夏先輩は正座をして正面に座っている金髪の女の子を恨めしげに見ていた。

「二人ともあまり浮かない顔してるが、なんかあつたんか？」

お祖母ちゃんは僕にお茶を出して、「どっこいせと」って声を出して女の子の隣に正座した。

「二人は初対面じゃろ、小奴は」

「セフィリア」ベェルフエール……って名前だよね

僕はお祖母ちゃんが言おうとしたことを代弁するみたいに女の子、セフィリアの名前を言った。

「ん？知つとつたのか？」

お祖母ちゃんはそれ程驚いた顔せず、

「……うん、2回会ってる。その娘、『死神』なんだよね？」

「知つとるなら話が早いの」

お祖母ちゃんは小さく咳払いをして僕達に言った。

「昨日、こやつの上司に頼まれてな。こやつの仕事を手伝うことになつてな。ついでに夏子さんのことも聞いておこうと思つての、家に来てもらったんじゃ」

「もういくつか話してあるわ、ちゃんと憶えてるわよね？」

セフィリアは僕と先輩を睨み付けるように目を細めて、

「うん、話の途中だったよね」

僕はその視線を気にすることなく笑つて言葉を返した。

「『事象回帰』がどういったものかは何となくわかったけど……

・問題があるつて言つてたよね」

「ええ、そうよ」

「その問題つて？」

「まあ、問題といえば問題なんだけど私からしたら別にどうでも良いんだけど。そっちの『霊現体』からすると大問題でしょうね」

セフィリアは感情を一切込めていない冷たい目で夏先輩を見ながら言つた。

「生き返る時間が指定出来ないの」

「生き返る時間？」

「簡単に説明するとね」

夏先輩を指差して、話を続ける。

「生き返る時間は死ぬちよつと前があんたで言えば理想のタイミングよね？」

「そう、ね」

「それが産まれた時だったり、子供の頃かもしれない。二、三年前ぐらいになるかもしれない。記憶自体は今のまま残るから、生き返る時間が前過ぎると辛いと思うわよ？」

セフィリアの言葉に夏先輩は青ざめた表情で言葉を失っていた。

「……………」

当然だと思う。

生き返る時間が一ヶ月とか二ヶ月。ある程度我慢したとしても三ヶ月、それくらいの時間で巻き戻って生き返られるなら良いと思うけど……………最悪、産まれた時に戻ってしまったら今まで大切な家族や友達と過ごしてきた時間を、思い出を全てをなかった事にしてしまう。

夏先輩がたくさん掛け替えない思い出を覚えていても、夏先輩以外の人全員がその全てをその思い出を経験していない状態になる。それは実質、生き返った後の世界では今ここにいる『神村夏子』という存在がいなかった事になる。

「まあ、このまま悪霊になって生き返る事も転生する事もできなくなるくらいなら良いんじゃないの？」

セフィリアは夏先輩の意見を聞こうとしているのか、そう言ってお茶を啜りながら夏先輩をじっと見ていた。

僕はセフィリアの行動に目を見開いた。

（お茶、飲めるってことは実態なのか……………今は、夏先輩の方に集中しないと）

それからしばらく沈黙が続き、セフィリアはお茶を何事もないように平然と少しずつ喉に流していて。夏先輩はセフィリアの言葉に感情を無くしてしまったみたいになだ呆然と顔を俯かせていた。

「……………本当に指定出来ないの？」

僕はどんな事でも良いからこの沈黙を壊したいと縋るようにもう一度セフィリアに問い掛けた。

「ええ、もうこれは運に任せるしかないわね」

「皆が夏先輩を忘れないようにする事はできないの？」

「ええ、全員が記憶を保持するのは無理ね。それこそ事象や時系列に歪みが出てしまうもの」

「そう、なんだ」

なけなしの努力は粉々に碎かれ、僕も首を垂らして黙るしかなかった。

客観的にいえば、セフィリアみたいに悪霊になるよりはマシだという考え方は一番の最善の選択だと思う。でも、頭でわかっていても心が拒絶してしまう。

問題も答えも簡単に結果は出てる……………でも、理屈じゃないんだ。

僕はどうにか方法はないかと良いとは言えない頭で悩みそをフル回転させて考えてみた。けど、良い方法なんてすぐに思いつくはずもなく。

「まあ、話はそんなところ。話は済んだし、私は一旦任務に戻るわ」
小さくため息を零しながらセフィリアは立ち上がり、

「一応『事象回帰』はする方向で任務は進めるけど、納得いかない
と後味も悪いだろうし暫く考えてみなさい。まあ、ほんとは考える
までもない事だけど心の整理つてのは必要でしょうし」

僕と夏先輩に交互に一瞥した。

「他に聞きたい事はないの？聞かれた事には答えるけど、聞かれな
い事には答えないわよ」

「……………うん、大丈夫」

「そつ、なら任務の事で頼み事もあるし、また来るわ……………それ
と」

そう言つと昼間と同じように黒い霧がセフィリアを包み、

「ん、何？」

僕は霧に包まれ消えていくセフィリアに視線を戻して。

「どっちの選択をするかはあんた達に任せるけど」

「うん」

「後悔しない方を選びなさいよ」

一瞬、聞き間違いかと思うくらい優しい音色が響いて。

「それじゃ、また明日」

「ちよっ」

僕は慌てて立ち上がった、

「行っちゃった」

「そう、ですね」

夏先輩の声に呆然と頷いた。

「飯くらい喰っていけば良かろうに……………」

釈然としない場に緊張感のないお祖母ちゃんの声がぼつりとしみこんで。

「夕飯の支度をしてくるでな、二人ともゆっくりしとるんじゃぞ」

「うん、ありがとう」

お祖母ちゃんは何か察してくれたのか、それ以外何も言わず和室を出た。

僕はお祖母ちゃんが出て行くのを確認して、視線を夏先輩に戻した。

「夏先輩……大丈夫」

「後悔しない選択か」

僕言葉を遮るように零した夏先輩の一言。

「へっ？」

消えてしまいそうなくらい小さな声でうまく聞き取れず、

「ううん、何でもない。それより蘭さんの手伝いに行こー！」

それを誤魔化すように夏先輩は襖をすり抜け、和室から消えた。

一人取り残された僕は、

「……………ハア」

ただただため息を吐くしかなかった。

―― 5月1日 午前 ――（前書き）

大変、遅くなりました。今回は二部構成でお届けします。

待たせておいて恐縮ですが4月30日に修正で長めに付け足しが増えました。ご面倒でなければもう一度後半だけ読んでこちらをお読みください。

―― 5月1日 午前 ――

あまりにも無力な自分の存在が罪のか？

それとも無力なものを平気で踏みにじるもの達しかないこの世界が罪なのか？

いや、その答えは既に出ている。

この世界が罪なのだ。

力あるものだけがのうのうと生き、弱いものを犠牲にしてもなんとも思わないものたちしかないこの世界が。

そして自分はこの世界を裁く権利を得たのだ。自分を罵り、汚すあの者達を裁く力と権利を。

自分の中で渦巻く憎しみと力を得た高揚感が入り混じり、何とも形容しがたい快感が自分を奮い立たせる。

あの者達を裁けと、あの者達の血肉を喰らえと――！！

心震わせ、動こうとした自分の横を平然とした顔で通り過ぎる者が一人。その者の顔には見覚えがあった。忘れたくても忘れることのできない者の一人だ。

何度も自分を罵り、汚し、優越感に浸っていた者。

その者の姿を見た途端。自分の中で理性の鎖が砕け、一つの衝動だけが自分を突き動かす。

幸い、他には誰の姿もなく、標的はこちらに背を向け、こちらの姿が見えていない。

何の躊躇いも無く体の内から暴れるように漲る力を解放する。

「ん？」

標的がこちらを振り向き、

「なっ!？」

驚愕に顔を歪ませた。

次の瞬間。目の前の世界は赤く染まり、罪を裁いたという達成感が自分の全てを満たしてくれた。

「……………」

どうしたら良いんだろう？

何の飾り気にも部屋天井とにらめっこを始めて……………どれくらいだろ？昨日、セフィリアが居なくなっただけからずっと今の状態。徹夜をしたのに頭は不思議なくらいハッキリしてる。

「母さんならどうするかな？」

ベット脇の棚に置いてある写真をとって 小さい頃の僕を優しく抱き上げて母さんを見つめる。

「生き返っても誰も自分のことを憶えてないのって辛いよね」

他の人と違って幽霊が「視」える分、特別なところもあると思うけど、どんなに特別だったとしても結局僕は人間でそれ以上のことは何も出来ないんだ。

「僕にできること、か……………」

(女の子を泣かせちゃ駄目よ)

突然、母さんのその言葉が頭の中に浮かんで。

「……………そうだね」

母さんが死ぬ前の日、添い寝をしてくれた時に約束したことだ。
(どんなに自分が辛くても苦しくても誰かを泣かせることはしないこと。特に女の子は絶対泣かしちゃ駄目よ)

母さんが死んでからずっとこの約束を護るのに必死だったけど。
この前、夏先輩を泣かせてしまったから約束を破ったことになるのか……………。

「まいったな…………約束、護れてないや」

ベットから跳ね起きて、母さんの写真を元の位置に戻して立ち上がる。

「もつとしっかりしなきゃ」

頬つぺたを思いつきり両手で叩いて、鋭い音と一緒に強烈な痛みが走って少し涙目になった。

よし！！気合い充填！！

「まずは」

夏先輩に会いに行こう。昨日の事で落ち込んでるだろうし……………
…少しでも元氣付けてあげないと。

頬つぺたを強く叩きすぎた事を少し後悔しながら部屋を出て、一先ず一階に降りた。降りたと同時に二人がいるであろうリビングに向かおうとして後ろの和室から和氣藹々な二人の声が聞こえてきて、和室の襖を開ける。

「二人とも何か楽し」

「可愛い……………っ！！」

僕の声を押しのけて夏先輩の奮える声が家中に響いた。

「ワシ的にはコレなんかお気に入りなんじゃが」

今度はお祖母ちゃんの満足そうな声が聞こえてきて僕は耳を抑えてながら二人の後ろから覗き込んだ。

「二人とも何を見て……………って!？」

僕は二人が見ていたものに思わず見開いた。

二人の手元、机の上には何冊ものアルバムが乱雑に置かれてい

て、

「な、なななななっ」

小さい頃の僕が写っていた。

「何見てるの二人とも!？」

「おお、凜いたのか？」

「あつ凜、おはよう」

二人とも満ち足りてる顔で僕を見上げ、僕はそんな二人にもう一度問い掛けた。

「何で昔の写真なんて、それも僕のじゃないか!！」

「いや、特に理由はないんじゃないが無性に見たくなつての。押し入れから引つ張りだしたんじゃない」

「今も可愛いけど、もつとこんなに可愛いときがあつたんだあ」

夏先輩は頬つぺたをほんのり赤くして、アルバムを見ながらうつとりしていた。

「夏子さんや、コレなんか悩殺もんじゃぞ」

「悩殺つて!？」

「どれですか!??お婆様!！」

夏先輩はお祖母ちゃんが指差した写真に食らいつくようにすりよつてまた興奮で奮える声で言った。

「もーっ!!!どうしてこんなに可愛いのか!？」

そこには三歳の僕がお祖母ちゃんの着物を掴んでいる所が写っていて、恥ずかしくてちよつと泣きそうになつてきた。

「当然じゃ、ワシの孫じゃからな!！」

お祖母ちゃんは威張つて小さい胸をムンツ!と張り、

「もう!!!恥ずかしいんだからやめてよ!!!」

僕は二人からアルバムを取り上げようと二人の間を割つて腕を伸ばして、それをお祖母ちゃんの手が止めに入る。

「っ!??お祖母ちゃん!？」

左手首を掴まれ、物凄い力で床に押しつけられた。

「凜や、おぬし……………誰のおかげで飯が喰えとるんじゃない?」

僕と同じで童顔の筈なのにそこからは年相応というか、鬼とか悪魔みたいな殺気が滲み出た顔で問い掛けてきた。

「お祖母ちゃんのおかげです」

情けない事に即答する僕。だって仕方ないよ、もう左手が紫色になつてて感覚がないんだもん。

「わかつておるなら黙って座っておれ」

「はい」

僕を説き伏せて（実際は暴力政治）納得したらしく、また夏先輩とアルバムで騒ぎ始めた。

僕はと言うと黙って座ってるのも気まずいので、

「お茶、煎れてくるね。お菓子は何でも良い？」

さり気なくその場から離れる事にした。

「おお、すまんの。食器棚の一番上の引き出しに羊羹ようかんが入っておるからの」

「はいはい、じゃあちよつと待ってて」

迅速に立ち上がり、リビングへ。

奥から聞こえてくる黄色い声はなるべく聞かない事にして、お茶っ葉と急須を出し一人分のお茶っ葉を入れてポットからお湯を注ぐ。いつもなら茶葉の風味を壊さないようにちゃんとお湯を沸かして煎れるのだけとお祖母ちゃん一人分だし、先程の仕返しと言うわけではないけど手間をかけたくなかった。

最初のお茶を少しだけ流し、残りを湯飲みに七分目まで注ぐ。

湯飲みを脇によけ包丁とまな板をしたの棚から取り出して、食器棚の所へ。

「えっと、羊羹は……あつたあつた」

お祖母ちゃんに言われた通り一番上の引き出しから羊羹の箱を取り出して台所へ戻る。

箱から羊羹を取り出して更に包装してあつた袋を破き、一口大に羊羹を切つて小皿に乗せた。

「……………」

夏先輩、無理してるな。

高校からの付き合いで一年ちょっとだけど、あんな風にはしゃぐ夏先輩は初めて見る。まあ……本当に可愛いって思っているだけかもしれないけど昨日の今日でと考えると、ね。

「あれ？」

ふと二人の声が聞こえてこなくなった。

「どうしたんだろ」

ちよっとした引っ掛かりが気になって二人の所に戻る。

「二人供、どうかしたの？」

襖を空けながら二人に問い掛けると、お祖母ちゃんは寂しげでどこか懐かしそうに写真を見つめていて、夏先輩は正に息を呑んで一枚の写真に釘付けになっていた。

「……………綺麗」

夏先輩の羨望に満ちた声に僕はゆっくりとお祖母ちゃんの前にお茶を置いた。

「その写真、懐かしいね」

僕は羊羹をお茶の横に添え、夏先輩の後ろに座った。

「ベットの横にも合ったけど……………この人」

「母です」

二人が釘付けになっていた写真。それは母さんが赤ん坊の僕を抱っこしている写真だった。

「お母さんからの遺伝だったんだ」

「はい。母も生まれつき変わった髪と瞳の色をして」

僕と同じ紫色の髪と紫色の瞳。そして惜しめない愛情で溢れてる笑顔。

「優しい母でした」

僕は懐かしむように笑って、

「そう、なんだ」

夏先輩は気を使ってくれたのかそれ以上母のことを口にしなかった。僕も母が死んだ事はもう随分前に話してあったし細かい事までは

説明したくなかったし、違う話題に持って行こうかと思ったのに。

「少し寂しい気がします」

思わずそう言ってしまった。

「えっ？」

「いえ、右眼で幽霊が『視』えるのに幽霊になった母の姿を『視』たことがないんです」

「それって」

「ええ、ちゃんと成仏して天国に行ったんだと思います」

正確には『魂』そのモノを持って行かれた、と言うのが正しいけど今は関係ない。

「でも、何でこんな力があるのに母さんは『視』る事ができないだろう？って悩んだ時期もあったんですよ」

僕はあまりにも無力だった。

「他の幽霊はたくさん『視』れても、母だけは『視』れない………
…こんな力に何の意味があるんだろう？こんな中途半端な力あったって何の意味も無いんじゃないかって」

でも、それは今も変わらない事実。だから、少しだけ酷い事をずると思う。

「たくさん悩んで………悩み抜いて」

「……答えは出たの？」

「いえ、出ないまま今まで来ちゃいました」

夏先輩は僕の痛みを共有しようとしてくれているのか、何かに耐えるような様子で僕を見つめてくれていた。僕はそんな夏先輩に心の中で謝った。

夏先輩、ごめんなさい。

「僕が幽霊を『視』えていても幽霊に触れる事ができても幽霊と話ができて、僕が幽霊してあげられる事なんて結局何もないのかもしれない」

「そ、そんなこと………」

「でも、これだけはハッキリ言えます」

もしかしたらこれは僕の思い上がりからの勘違いかもしれないけど。それでも僕にできるのはこんな事くらい。

「幽霊でも、僕にはその人の重荷を少しは一緒に背負ってあげられるんじゃないかって」

夏先輩の顔を真っ直ぐに見つめて、

「全部は背負えるなんて思ってます、むしろ全部背負えるって思う事が間違っているかもしれないんです……でも、そうじゃなくて、そつと夏先輩の頭に手を置いた。

「り、凜？」

夏先輩はいきなり事で驚いてるのか、顔を赤くしてあたふたしていたけど構わず話を続けた。

「幽霊になっても結局、その人はその人で。怒ったり、泣いたり、笑ったり、悩んだり……生きてる僕達と何も変わらない。だからせめて『視』えてる僕くらいその人達と一緒に怒って、泣いて、笑って、悩んで……一緒に時間を過ごせたら、それは意味のあるものの何じゃないかって」

たとえそれが唯の自己満足だと非難されても、僕は願う。

「だから夏先輩」

昔、母さんにしてもらったように夏先輩の頭を優しく撫でて。

「夏先輩がこのまま幽霊のままで良いって思っているなら僕は夏先輩が地縛霊にならない方法を探してみせます。でも、やっぱり生き返りたいって思うなら僕はそれを全力でサポートします」

「……でも、ね」

「わかってます」

夏先輩が何を言おうとしたのかは何となく、というか確信かな。

「生き返ってしまったら夏先輩の事をみんなが忘れてしまいます。今まで過ごしてきた大切な人達との掛け替えのない思い出……僕だってそんな事になるならって思います。でも、そうならない方法を探してみせます」

「そんなの……無理よ！！神様だって方法なんて無いって言ったた

じゃない!!」

「たしかにそう言っていました」

「そう、でしょう!! 神様だって無理なのに凜にできるわけ無いじゃない!!」

夏先輩は僕の手を振り払って、勢い良く浮き上がる。

さっきまでとは別の感情に震える声。

「確かに神様に出来ないことが僕に出来るなんて、そんな甘い事考えてません」

「考えてるからそういう事が言えるのよ!!」

今まで溜め込んでいたものを吐き出すような口調が物語ってる。

どんなに平気な顔をしていても心の中ではずっと苦しんでいた。

未練を思い出せない焦りに地縛霊になってしまいかもしれないという不安。そんな中で生き返る事が出来るっていう希望を見せられて、それと引き換えに失ってしまう大切な思い出への葛藤。きつと生きている僕なんか理解できるはずがない大きな暗闇の中で戦っていたんだ。

「聞かれたことには答えるけど、聞かれないことには答えない……」

……セフィリアがそう言ったの憶えていますか？」

「憶えてるわ、昨日の今日だもの。忘れるわけじゃない」

落ちて着こうとしているのか、声は震えるていたけど声量を抑えて返事を返してくれた。

「じゃあ、僕が皆が夏先輩を忘れないようにすることは出来ないの? って質問した時は何て言ったか憶えてますか？」

「ええ、全員が憶えているのは無……って!？」

夏先輩が気付いてくれたみたいで、僕は本の少しだけ口元が緩むのがわかった。

「全員が、って言いましたよね」

そう、あの時セフィリアはそう言った。

「もしかしたら駄目かもしれない、でもあの時に僕は誰か一人でも憶えてることは出来ないの? って聞けなかったんです」

色んな事を言われて頭がぐちゃぐちゃになっていて正直、諦めかけてたところもあったし。

「可能性はまだ残ってます。でも、それが駄目でも」

僕は夏先輩に嘘偽りない気持ちを伝えた。

「他の皆が忘れてしまっても僕だけは絶対に夏先輩の事を憶えてます」

その為に何か代償が必要だというのなら、僕からならいくらでも持っていけば良い。

「……………そんなの、わからないじゃない」

夏先輩は顔を見られたくないのか伏せたまま消えてしまいそうな声で呟いた。

「そうですね、でも夏先輩」

そう言って僕はまた夏先輩の頭を撫でて、夏先輩がまた笑顔でいてくれるように精一杯笑って見せた。

「嫌だって言っても、忘れてあげませんよ？」

それは夏先輩が望んだ答えにはなっていないけど、今の自分にはこれが精一杯の答え。

「……………して」

「えっ？」

「約束して」

夏先輩は顔を上げて、僕の手をそっと掴み胸の前で両手でぎゅっと握る。

「約束して、絶対に私の事忘れないって…………絶対に憶えてるって」

僕の手を握っている両手から伝わってくる野は死んでいるはずなのに暖かくて柔らかい感触。あんな理不尽な事が起きなければずっと大切な人達と一緒にあった温もり。

僕は夏先輩の想いに、願いに誓うようにもう一度口にした。

「はい、憶えています。世界中の誰もが夏先輩の事を忘れても僕だけは夏先輩の事を憶えています、絶対に」

握られた強さと同じくらいに自分の気持ちが伝わるように夏先輩

の手を握り替えて、

「……………」

「……………」

僕と夏先輩は互いに無言で見つめ合ったまま。

「コホンッ！！」

僕達の沈黙を突然、一切の遠慮など無い咳払いが突き破った。

僕と夏先輩は咳払いが聞こえてきた方に顔を向けると、お祖母ちゃんにニヤニヤしながらこっちを見ていた。

「いやあ、ラブラブじゃのう」

お祖母ちゃんのその一言で僕と先輩の顔が一気に赤くなって。

「何故じゃろうな？憶えてる憶えてないの話じゃったのに愛の告白のようじゃったのう」

僕と夏先輩はその言葉にハツとなり、互いに手を放して。その様子にお祖母ちゃんは口元を手で隠し、これ以上なくらい楽しんだと言った顔で笑っていた。

「いや！！これは愛の告白じゃなくてっ！！」

「いやいや、ご馳走様……とでも言っておこうかの」

「ぐっ」

自分でもハッキリと顔が赤くなっているのがわかって、

「夏先輩も黙ってないで何かっ！？」

夏先輩に助けを求めようとして。

「こ、告白……………っ！！」

茹で蛸を通り越してもはや、機関車のように頭からモクモクと湯気が出ていた。

「な、夏先輩」

「で、曾孫はいつになりそうじゃ？」

「ひ、曾孫！？」

よっぽど面白いのか、追い打ちをかけるようにお祖母ちゃんは夏先輩にすり寄り、

「お祖母ちゃん！！いい加減にしないと怒るよ！！」

「ワシはただ曾孫の顔を見ただけじゃ!!」

僕はお祖母ちゃんの肩を掴んで夏先輩から引っぺがした。

「り、凜!!あのね」

不意に夏先輩の声に僕は心臓が飛び跳ねて。

「なん、何ですか!？夏先輩」

「あのね、いきなりで悪いと思うんだけど……生きたい所があるんだけど」

「なんじゃ、ラッブあ!？」

瞬間、僕はお祖母ちゃんの下顎を上に跳ね上げ言葉をちぎる。

お祖母ちゃんは多分、舌を噛んだのだと思う。体を震わせて口を押さえながらその場に蹲った。

「どこに行きたいんですか？」

夏先輩は僕の動きに驚いていたようだったが、僕は何もなかった顔で夏先輩に問い掛けた。

「う、うん……私の家なんだけど」

「先輩の家、ですか？」

「うん……ダメかな？」

夏先輩は恐る恐るといった感じで上目遣いで僕を見る。

夏先輩の言い分はもつともだ。僕が夏先輩と一緒に行動してからというもの、一度も先輩の家に行っていない。未練を探している今の状況としては最有力候補の一つであることに代わりはない、それに。

「お父……冬樹さんですね」

「うん。お父さんどうしているのかな、って」

やっぱり死んでしまったと言っても先輩は間違いなく冬樹さんの娘である事に代わりはないし、家族の事を気遣うのは当然の事。それにもしかしたら未練を思い出す切っ掛けになるかもしれない。

「……行きましょう、夏先輩」

「いいの？」

「はい!!すぐに着替えて準備しますから、ちょっと外で待ってて

もらって良いですか？」

「ありがとう！！私、外で待ってるね」

夏先輩は花が咲いたように明るくなって、意気揚々と襖をすり抜けていった。

「ふうっ……………」

僕は小さくため息を吐き、襖を開ける。そして。

「お祖母ちゃん、ありがとう」

襖を開けた状態のまま、蹲っているお祖母ちゃんに心からの感謝を込めて言った。

「……………何の事じゃ？」

「夏先輩の事だよ」

お祖母ちゃんは惚けてはいたけど、あのちょうつとした間が教えてくれた。

「夏先輩を元気づけようとして、ああしてくれたんですよ？」

「ワシはただ無性にアルバムが見たくなったただけじゃぞ」

「ふーん、そうなんだ。僕の勘違いかな？」

「ああ、そうじゃよ。それは凜の勘違いじゃよ」

「そう」

「そうじゃ」

僕はお祖母ちゃんとの遣り取りに自然と口元が緩んで、もう一度言った。

「ありがとう、お祖母ちゃん」

今度は返事は帰ってこなかったけど、それでも良かった。

僕は和室から一步廊下に出た時。

「気をつけてな」

後ろからかけられたこの言葉に確信した。

「わかってるよ。行ってくるね」

「おう」

顔を合わせはしなかったけどきつと僕とお祖母ちゃんは同じ顔してるって。

今日も天気が良いなあ。

死んでいるから、もう鼓動は感じないけどじんわり胸の辺りが温かくなるのを感じた。

「……………凜」

さっきの遣り取りを思い出すと、また顔が熱くなってくる。

（世界中の誰もが夏先輩の事を忘れても僕だけは夏先輩の事を憶えています）

凜が私に向けて言ってくれた言葉。

「世界中っていうのは言い過ぎじゃないかな」

言葉とは裏腹に心は凄く満たされてる。

たった一言なのに、自分の全てを包んでくれるようなそんな安心感。生きていた時でさえこんなにも誰かの言葉が心に響いた事なんて無かったと思う。

「……………」

余韻に浸りながら空を見つめて。

（曾孫が見たいんじゃない）

突然、蘭さんの言葉が頭にフラッシュバックして、また体中が熱くなる。

「曾孫……………か」

今自分は死んでしまっているけど、もし生き返って凜と結婚して子供ができたら。

「可愛い子が生まれるのかな？」

不意に言葉にしてしまった後に猛烈な恥ずかしさが襲ってきた。

「いや、たとえばの話でっ！これはその、凜と結婚とか恋人とかっていう関係でもないし私は全然そんな凜と私の子供だったら絶対に可愛いつていう自信があるっていうか」

そこまで言つてハッとなつて蹲った。

何言つてんだろ、私。全部唯漏れ……。

自分以外に誰もいなくて助かった。こんなこと誰かに聞かれでもしたら。

「つて、私死んでるし」

さつきから訳のわからない自問自答をしている自分に嫌気がさして。

「こんな事になるならあの時、っ！？」

唐突にこめかみに釘を打ち込まれたような痛みが走って、

「いつ……つつう。何？今の」

痛みが走ると同時に頭の中に何か映像みたいなものが映って。

「あれは……」

微かにだけと映像には誰かの顔が映し出されていて、その人物の顔を思い出そうとして後ろからドアが開く音がして、反射的に後ろを振り向いた。

「夏先輩、お待たせしました」

「早かったね」

「そうですか？」

「私は誰かと出かける時は十五分くらい身支度に時間がかかるけど、男の人はそうでもないみたいね」

私は見えない事を良い事にある事を思いついた。

「さあ、行きましようか……つて！？夏先輩！？」

「いいでしょ、どうせ凜意外には見えてないし」

凜は私がいきなり腕を組んだ事に大慌てで、

「いや、そうかもしれませんけど」

凜の口を封じるのに思いつきり胸を腕に押しつけてみた。

「なっ！？」

「ほら、早く行こう!!」

案の定、凜は顔を真っ赤にして黙ってしまった。

私は凜に顔を見られないようにちよつとだけ前に進んで、歩いてる真似を試みる。

きつと凜ほどではないと思うけど私の顔も赤くなっていると思う。

「……………」

「……………」

それから家に着くまでずっと黙ったままだったけど、互いに触れ合っている熱の感触が心地よかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6470/>

れせぶしょん？

2011年11月26日16時47分発行